

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER ケンビレター

no. 109

2021. spring



small planet / Nakayama Racecourse, Chiba, Japan / 2005 © Naoki Honjo

本城直季 (un)real utopia

2021(令和3)年5月22日[土]ー7月11日[日]

実在する風景をまるでミニチュアのように捉えた作品で知られる写真家・本城直季。四国初個展となる本展では、第32回木村伊兵衛写真賞を受賞した「small planet」シリーズをはじめ、高知を写した新作や未発表作品など全14シリーズを一挙公開します。

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

Exhibition Information – 01

(un) real utopia

多くの人々に賑わうプールや、密集する高層ビル群、壮大なサバンナを闊歩する動物たち。一見すると、ミニチュア模型を写したようにも見えるこれらの写真は、いずれも実在する風景を被写体にしています。

写真家の本城直季(1978ー)は、大判カメラの「アオリ」と呼ばれるレンズ操作によって、ジオラマのように風景を切り取る作品で知られています。東京という世界屈指の大都会で生まれ育った本城は、幼いころから自らが暮らす街に「不思議な違和感」を抱いており、「自分の住んでいる場所を知りたい、俯瞰したい」という思いが、作品制作のモチベーションになっているといえます。本城によって捉えられた風景は、簡単に吹き飛ばされたり触ったら壊れてしまいそうな、脆く儚い理想郷のようにも見えます。都市も模型も、人間による“つくりもの”という意味では同じであり、風景をミニチュア化して写真に収める行為とは、この世界を創造主のような視点で見つめ直そうとする試みと言えるかも知れません。一方で、夜の住宅街を写す「LIGHT HOUSE」シリーズは、数分間以上シャッターを開いたままにする「長時間露光」が用いられています。何気ない街かどが、街灯や月明かりなどのわずかな光によってフィルムに定着されることで、現実味のない映画セットのような独特の表情をみせます。世界への違和感を足掛かりに、カメラのメカニズムを巧みに用いることで、リアル(本物、現実)を被写体としながら、アンリアル(架空の、驚くべき)な世界を描き出しているという点で、ミニチュア的な表現とその思想は一貫しています。

この度当館で開催する「本城直季 (un) real utopia」は、これまでの本城の仕事を総覧できる四国初の個展です。“写真界の芥川賞”と称される木村伊兵衛写真賞を受賞した「small planet」をはじめ、アフリカのサバンナを切り取った「kenya」や、東日本大震災後の東北地方を写した「tohoku 311」など、初公開を含む全14シリーズを一挙公開します。高知県内での撮り下ろし作品も本展の見どころのひとつ。今年、県内にてヘリコプターによる空撮と路上での撮影が行われました。本城の眼によってミニチュア化された高知の姿は、普段何気なく暮らしていると気づかないような、驚きをもたらしてくれることでしょう。 文・朝倉芽生(当館学芸員)



左:今年3月、高知市内某所にて。「LIGHT HOUSE」の撮影では、1枚毎に場所を決め、三脚を立てて大判カメラをセッティングし、フィルムを装填して長時間露光…という手順を踏むため、日没から未明までかけて撮影できるカットは、10枚に満たないほどだそうです。
右:2007年にロンドンで行われた空撮の様子。撮影:川原恵一

2021(令和3)年5月22日[土]ー7月11日[日]

9:00ー17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料＝一般当日 1,200円(960円)／大学生 850円(680円)／高校生以下無料

※()内は20名以上の団体割引料金。※年間観覧券所持者は無料。
※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。
主催＝高知県立美術館／朝日新聞社／KSSさんテレビ
協賛＝株式会社サンエムカラー 協力＝株式会社フレームマン／nap gallery
後援＝高知県教育委員会／高知市教育委員会／KCB 高知ケーブルテレビ／エフエム高知／高知シティFM放送

Exhibition Information – 02

生誕150年 ジョルジュ・ルオー《ミゼレーレ》展

ジョルジュ・ルオーは太い輪郭線や厚く塗った油絵具が特徴的な力強い作風で知られます。今回展示する《ミゼレーレ》は1948年に出版されたモノクロ版画58点から成る版画集です。「第1部 ミゼレーレ」と「第2部 戦争」の2部から成り、各版画には聖書や慣用句、ルオー自身の詩などから引用された表題が付されています。描かれているのはキリストや聖母子、兵士や骸骨、郷愁を感じさせる風景など、ルオーの油彩画作品にも見られる画家が生涯かけて取り組んだテーマばかりです。最大で約60×45cmという大画面に刷られた本作は、制作過程も技法も複雑でした。1912年の父親の死をきっかけとして構想を始め、大量の下絵を制作しますが最終的に版画化されたのは58枚でした。下絵の写真から版を作り、さらにそれを削ったり、磨いたりするなど、試行錯誤を重ねて制作されており、ときにはモチーフを変更したこともわかっています。構想から出版まで約36年。その間、第1次世界大戦や出版元となる予定だった人物の死など、多くの出来事がありました。深みと力を湛えたルオー版画の傑作をぜひご覧ください。 文・柳澤宏美(当館学芸員)



《孤独者通り》



《渇きと怖れの国では》

全てジョルジュ・ルオー《ミゼレーレ》(1948年出版)より



《そして柔らかな布を持ったヴェロニカは、今なお道を行く...》

2021年3月23日[火]ー5月23日[日]

1階第4展示室

9:00ー17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料＝一般370円(290円)／大学生260円(200円)／高校生以下無料

Naoki Honjo Exhibition

本城直季 この世界にあなたがいる



small planet / Tokyo, Japan / 2005



small planet / Tokyo, Japan / 2002



LIGHT HOUSE / Taito-ku, Tokyo / 2011
© Naoki Honjo



kenya / giraffe / 2008

石元展開幕

「生誕100年 石元泰博写真展」(会期:1月16日～3月14日)が、ついに最終会場の当館にて開催されました。約450点もの作品・資料によって、石元芸術の全貌を紹介する大規模回顧展であった本展では、作品の多様かつ揺るぎない魅力を紹介するのはもちろん、写真家の生き様や息遣いが伝わるような資料展示にも力を入れました。古くから石元を知る方からは、「実際に石元さんに会いにきたみたい」という声も。ちなみに、高知会場のイメージカラーは蛍光ブルー。石元の原風景となった高知の広い空と海や、代表作・桂離宮の市松模様を彷彿とさせつつ、どこか現代的なイメージの色です。青が基調の石元宅リビング(常設で再現展示中)とも響き合い、写真家の眼差しを体現するインパクト大なセルフ・ポートレートとともに、生誕100年を祝福するにふさわしいビジュアルになったと思います。スペシャルな展覧会はこれで一旦閉幕ですが、当館では引き続き、石元作品や写真の魅力を発信していきます。 文・朝倉芽生(当館学芸員)



第3会場「ヤスとシゲルーふたりのあゆみ」は、公私ともに二人三脚だった石元夫妻の軌跡を辿る当館オリジナルのパートでした。
撮影:中島健蔵

ミロコマチコ展ただいま準備中

展覧会「ミロコマチコ いきものたちはわたしのかがみ」(会期:7月24日ー9月20日)の下見のため、ミロコさんが来高しました。空港から直行したアジア食堂 歩屋では、高知在住の布作家・早川ユミさんと一緒にランチミーティングを和やかに行いました。これまでもミロコさんは、プライベートやイベントでたびたび高知を訪れています。歩屋の店内では、記念イベントなどで描かれたミロコ作品を見ることができます。開店10周年記念(2014年)に描かれた店舗周辺の動植物をイメージした壁画をはじめ、15周年(2019年)には猫好きな店主を彷彿とさせる作品がコレクションに加わりました。「ミロコ愛」溢れる高知の皆さまのお力を借りて、暑い夏を更に熱くしていきたいと思います。 文・長山美緒(当館主任学芸員)



看板猫サビちゃんと



壁に描かれたかわいい動物たち



ライブイベント作品と記念撮影
(左から 歩屋店主・高橋歩美さん、ミロコさん、早川さん)

MUSEUM HALL INFO

美術館ホール 報告

高知ライブエール・プロジェクト

サエボーグ「Cycle of L」

◎特別展示：2020年12月9日(水)―14日(月) 県民ギャラリー

◎公演：2020年12月16日(水)―18日(金) 美術館ホール

ラテックスと呼ばれる天然ゴムを使い、自分自身の体を採寸してキュートな形にデフォルメした家畜着ぐるみを制作するアーティスト、サエボーグさん。2019年発表の「House of L」の鑑賞後に湧き上がった多幸感と実際の家畜を思い浮かべて更に返る複雑さが忘れられず、いつかお招きしたいと企画を温めていた1年後、早々に機会が巡ってきました。突然の依頼にも関わらず「はい、やります!」の二つ返事。美術館と劇場を併設する当館ならではの公演に先駆けた特別展示も加わり、公演と合わせて急ピッチで準備が進められました。各専門スタッフや特別展示を担当したT学芸員には頭が上がりません。展示室に圧倒的なスケールで登場した《Pigpen》やサエボーグさん念願の新作《Pootopia》の披露を経て、動くとともに魅力的な家畜たちが四国地域の有志らを含む15名の着ぐるみ出演者の愛らしいパフォーマンスで観客を楽しませました。ラストはご当地の「よさこい」も登場。本公演の様子は当館WEBサイトでダイジェスト映像も公開しましたのでどうぞご覧ください。
文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)

四万十川国際音楽祭

遠藤真理(チェロ)&吉田秀(コントラバス)デュオコンサート

◎2021年1月10日(日)ミニコンサート 美術館ホール、11日(月・祝) 四万十市立文化センター

コロナ禍、四万十市での積雪の中、読売日本交響楽団のソロ・チェロ奏者の遠藤真理さん、NHK交響楽団首席コントラバス奏者の吉田秀さん、日本を代表するお二人による心あたたまるコンサートを、四万十川国際音楽祭実行委員会、四万十市教育委員会の皆さんと実施しました。昨年の8月からお二人とチラシ、プログラムなどについて、やりとりをしていましたが、開催できるかしらと不安になる事もあり、龍馬空港で大きな楽器を背負ったお二人を柳川さん(四万十川国際音楽祭実行委員会・事務局)とお出迎えした時に、ご来高いただけた喜びとコンサートへの実感が湧きました。本番は、チェロとコントラバスの低音の魅力十分に堪能できる楽曲とお二人の技術の高さと表現力、そしてお人柄が表れるMC、出前クラシック教室でも長年ご活躍中の木村成美さんのピアノの伴奏で、お客様にもご満足いただける素敵なひとときとなりました。

文・山脇有美(当館企画事業課)



左:「チェロとコントラバスのための二重奏曲」 右:コンサート終了後(左から 吉田さん、木村さん、遠藤さん)



左:キラキラのよさこいを披露するフクロガシ、アリ、家畜たち、観客のみなさん 右:サエボーグにミルクをあげる子どもたち

撮影:鈴井泰輔

「高知県立美術館能楽堂にて 津野山神楽を舞う」

◎2021年1月3日(日) 能楽堂

出演＝津野山神楽保存会

お正月の恒例行事となっている能楽堂での神楽公演。4回目の今年、高知県高岡郡梶原町で継承されている「津野山神楽」の上演とライブ配信を行いました。新型コロナウイルス対策で間隔を空けてお座りいただき、例年に比べ静かな雰囲気でしたが、厳しい時期だけに、心中の願いや祈りが会場いっぱい満ちているようでした。

文・秦泉寺なほ(当館企画事業課)



冬の定期上映会

「ATGとその時代」

◎2021年1月23日(土)・24日(日)

社会問題、世相、風俗などを斬新に描き、先鋭的で自由な映像表現の作品を多く生み出したATG(日本アート・シアター・ギルド)。今回は一大ムーブメントを巻き起こしたATGの魅力に迫りました。様々なメッセージが込められた個性あふれる作品群は、制作された1960～70年代を経験していない若い世代の方々にも新鮮に映ったようでした。あわせて、映画研究家故・星加敏文氏のコレクションから関連したポスターやチラシを展示し、時代性あふれるデザインに当時の空気も感じていただきました。文・秦泉寺なほ(当館企画事業課)

